

シュティフター『晩夏』 (1)

鈴木 善 平

Adalbert Stifters “Nachsommer”. (1)

SUZUKI Zenpei

Den Roman Stifters “Nachsommer” nennt man auf japanisch “Banka”. Es gibt noch ein deutsches Wort für “Banka”, das heißt “Spätsommer”.

Wenn man aber nach dem Unterschied zwischen den beiden Wörtern Nach- und Spätsommer sucht, kann man folgende Kennzeichnungswörter finden, nämlich bei Spätsommer “Ende” oder “letzt”, und bei Nachsommer “noch einmal”. Der Titel “Nachsommer” drückt bildlich ein spätes nocheinmaliges Liebesglück aus.

Stifter schrieb den Roman, um mit Fanny, der Braut seiner Ideen, eine nocheinmalige Liebe, Nachsommer, zu leben.

Nachsommer と Spätsommer

I

シュティフターの小説『晩夏』(1857)の原題名は Nachsommer であるが、晩夏に当るドイツ語には、また、Spätsommer がある。

ドイツ語の辞書においても、Nachsommer と Spätsommer を同義としているのが見られる。19世紀のドイツ語文献を読むのに不可欠とされる、グリム、ハイネ、ザンダース・ヴェルフィング、ヴァイガント・ヒルト等のドイツ語辞典は、Nachsommer を Spätsommer(夏の最後)と同義として扱っている。そしてグリムとザンダース・ヴェルフィングによれば、Nachsommer と Spätsommer は共に、夏の最後という意味のほか、秋になってからの夏日という意味も持っていることになる。(表1)

一方、最近のドイツ語辞典、クラッペンバッハ、ドゥーデン、ブロックハウス・ヴァーリヒ等の各ドイツ語辞典では、クラッペンバッハが Nachsommer の語義の中に Spätsommer の語を入れている。(表1)

さて次に、Nachsommer と Spätsommer の相違点を見てみたい。

上記の各辞典で見る如く、Spätsommer の語義のすべてに共通する語は、「最後 (Ende, letzt)」である。(表1) 即ち Spätsommer は、夏の経過の中での「最後の (letzt)」部分である。これに対して、Nachsommer は、夏の終りのまたは秋になってからの、「もう一度の (noch einmal)」夏日である。春になってから振り返した寒さの日々を表わす Nachwinter もこれと同じ語法で、「もう一度の」冬である。

Spätsommer が、秋の始まる前の、夏の「最後の」段階であることは、例えば生物気象学カレンダーの用語からも知られる。(表2)

小説『晩夏』には、Spätherbst または spät- Herbst の語が多く用いられているが、次の例からも、Spätsommer が夏の最後の部分であることを推測できよう。

Der späte Herbst war endlich dem Beginne des Winters gewichen. (注1)

シュティフター自身も、小説『晩夏』において、Nachsommer と Spätsommer を、上に述べた如くに区別して用いていると思われる。

Spätsommer :

Eines Tages gegen den Spätsommer hin hörte ich mit Allem auf. . . . Ich ging in das Rothmoor, um nachzusehen, wie weit die Dinge. . . . gediehen wären. . . . Die Fortschritte waren zu loben. Man sagte, — und ich selber sah die Möglichkeit ein — daß in diesem Sommer noch Alles fertig werden würde. (注2)

Nachsommer :

Gegen den Herbst kömmt wieder eine freiere Zeit. Da haben sie (=die Vögel 筆者注) gleichsam einen Nachsommer und spielen eine Weile, ehe sie fortgehen. (注3)

シュティフターの小説『晩夏』の原題名が, Spätsommer ではなくて, Nachsommer であるということか

ら, 小説『晩夏』には, 「もう一度の」という思いが背後にあると考えたい。

| ドイツ語辞典名 | Nachsommer の語義 | Spätsommer の語義 |
|---|---|--|
| Sanders 1876 Grimm Bd.7 N.O.P.Q. 1889 | (項目なし) sommerwetter im herbste, spätsommer. | (項目なし) der letzte theil des sommers, auch vom herbstanfange bei schönem, warmem wetter. |
| Heyne 1905~06 Sanders-Würfing 1909 | Spätsommer. die dem eigentlichen Sommer nachfolgende warme Zeit (Spät-, Altweibersommer). | Zeit gegen Ende des Sommers. (項目なし) |
| Weigand-Hirt 1909~10 Klappenbach 1977 | Spätsommer. nochmaliges Auftreten von sommerlichem Wetter im Herbst, Spätsommer. | (項目なし) die letzten Wochen des Sommers vor Beginn des Herbstes. |
| Duden 1976~81 | Tage im späten Sommer od. im frühen Herbst, an denen bei freundlichem, sonnigem Wetter noch einmal eine mild-sommerliche Atmosphäre entsteht. | letzte Phase des Sommers. |
| Brockhaus-Wahrig 1980~84 | 1. sommerliche Herbsttage. 2. 《fig.; geh.》 spätes Liebesglück. | die letzten Wochen des Sommers. |

表 1

| Phänologischer Kalender | |
|-------------------------|---|
| Einzug des | Mittlerer Beginn |
| Vorfrühlings | der Schneeglöckchenblüte |
| Erstfrühlings | des Erscheinens der Blattoberfläche der Roßkastanie |
| Vollfrühlings | der Flieder- oder Apfelblüte |
| Vorsommers | der Holunderblüte |
| Frühsommers | der Winterroggenblüte |
| Hochsommers | der Winterroggenernte |
| Spätsommers | der Fruchtreife der Kornelkirsche |
| Herbstes | der Roßkastanienreife |
| Spätherbstes | der Laubverfärbung |

表 2

(注 8)

II

Nachsommer の比喩的意味として, 上記ブロックハウス・ヴァーリヒは, 「spätes Liebesglück」を挙げている。(表 1) 「晩年に訪れた愛の幸福」である。グリムドイツ語辞典によれば, ジャン・パウルの小説『Titan』

(1800~1803) にもこの比喩的意味における Nachsommer の用例がある。(注 4)

Spätsommer には, 上記の各辞典に見る限り, この種の比喩的意味は無いようである。(表 1)

シュティフターの小説『晩夏』の原題名 Nachsommer が, この比喩的意味で用いられていることは言うまでも

ないが、彼自身が作中人物に語らせている言葉によって、それをもう少し詳しく見て行きたい。

第3巻「回顧」の章で、マティルデと共に「晩夏」の生活を送るリーザハは、自分たち2人の今過ごしているNachsommerについて次のように言う。

Zwischen Mathilden und mir war ein eigenes Verhältniß. Es gibt eine eheliche Liebe, die nach den Tagen der feurigen gewitterartigen Liebe, die den Mann zu dem Weibe führt, als stille, durchaus aufrichtige, süße Freundschaft auftritt, die über alles Lob und über allen Tadel erhaben ist, und die vielleicht das Spiegelklarste ist, was menschliche Verhältnisse aufzuweisen haben. Diese Liebe trat ein. Sie ist innig ohne Selbstsucht, freut sich, mit dem Andern zusammen zu sein, sucht seine Tage zu schmücken und zu verlängern, ist zart und hat gleichsam keinen irdischen Ursprung an sich. Mathilde nimmt Antheil an jeder meiner Bestrebungen. Sie geht mit mir in den Räumen meines Hauses herum, ist mit mir in dem Garten, betrachtet die Blumen oder Gemüse, ist in dem Meierhofe und schaut seine Ertragnisse an, geht in das Schreinerhaus und betrachtet, was wir machen, und sie theilt sich an unserer Kunst und selbst an unsern wissenschaftlichen Bestrebungen. Ich sehe in ihrem Hause nach, betrachte die Dinge im Schlosse, im Meierhofe, auf den Feldern, nehme Theil an ihren Wünschen und Meinungen und schloß die Erziehung und die Zukunft ihrer Kinder in mein Herz. So leben wir in Glück und Stetigkeit gleichsam einen Nachsommer ohne vorhergegangenen Sommer. (注5)

以上長々と引用したが、ここで問題としたいのは次のことである。

リーザハははじめに、「燃えるような愛の嵐の日々のあとに、静かな誠実な甘美な友情として現れる結婚の愛というものがあり、この愛が始まったのだ。」と云っているが、この燃えるような愛の嵐の日々とは、とりもなおさず「夏」であり、そのあと現れる静かな愛とはNachsommerのことである、と考えられる。とすると、夏のあとNachsommerがあるということになる。

ところがそのリーザハが、この引用文の最後の所では、「このようにして我々は、幸福と安定の中で、いわば先

行した夏のないNachsommerを生きている。」と言っているのである。即ち、リーザハとマティルデの2人は、夏のあとNachsommerを過ごしており、同時に、先行した夏のないNachsommerを過ごしているということになる。これは矛盾することではなからうか。問題とはこれである。

リーザハとマティルデの2人には、若き日の燃える「夏」があったのであるから、「夏のあとNachsommerを過ごしている」は2人の事実即している。従って、先行した夏のないNachsommer—einen Nachsommer ohne vorhergegangenen Sommer—をどう考えたならば、夏のあとNachsommerを過ごしている2人の事実即した表現として理解され得るか、という所に問題解決の道があると思われる。

今、Kaffee mit Milch

Kaffee ohne Milch

の、mit と ohne の対比にならって、

Nachsommer mit vorhergegangenen Sommer

Nachsommer ohne vorhergegangenen Sommer

と並べて考えてみよう。

「先行した夏のあるNachsommer」とは、云いかえれば、夏のあとに来たNachsommerである。これは更に云いかえるならば、夏に続いたNachsommerであって、このNachsommerは、夏の経過の中の最後の部分即ちSpätsommerにはかならない。我々はさきに挙げた辞書において、NachsommerをSpätsommer(夏の最後)と同義としているのを見た。

これに対して、「先行した夏のないNachsommer」は、夏に続かないNachsommerであり、夏が終って、既に秋に入ってから、もう一度やった来たNachsommerということになる。小説『晩夏』の事実即して云えば、熱く愛し合った日々という夏があって、そのあと、引き離されていた長い年月を経てから、もう一度現れた静かな誠実な愛のNachsommerである。

このように考えるならば、前述のリーザハの2つの言葉「夏のあとNachsommerを過ごしている」と「先行した夏のないNachsommerを過ごしている」とは、共に2人の事実を表すもので、矛盾するものではないことが明らかである。

シュティフター自身は、この小論のIで見たように、NachsommerとSpätsommerとをそれぞれ区別して用いているが、同じくIのはじめに見たように、当時NachsommerはSpätsommerと同義であって、Nachsommerも、夏の最後の部分というSpätsommerの意味を持っていたのである。それ故、シュティフターは、ここに言うNachsommerは夏の最後の部分の意ではなく

て、もう一度の夏の意である、ということを確認しなければならず、そのために、「先行した夏のない Nachsommer」という表現を用いたと思われるのである。

小説『晩夏』の原題名『Nachsommer』の比喩的意味は、単なる「晩年に訪れた愛の幸福 (spätes Liebesglück)」ではなくて、「晩年に訪れた『もう一度の』愛の幸福」ということになろう。

III

1827年夏、ウィーンの法律学生であったシュティフターは、オーバーブラーンに帰郷し、隣の町フリートベルクに住むフランチスカ・グライブル (愛称ファニー) を識る。彼は21才余、ファニーは19才である。(注6)

翌1828年の夏にも、彼は帰郷してグライブル家のまどいに加わる。2人は愛し合う。ウィーンに帰った彼は、ファニーに手紙を書く。7通 (が現存している) の恋文の第1通である。こうして、1828年11月から1830年2月にかけて、ウィーンから6通 (が現存している) の恋文がファニーに送られる。

彼は長い恋文を書いた。どの手紙にも、「きっとお便りをください」「すぐにお便りをください」「早くお便りをください」「たくさん書いてください」「お願いだからお便りをください」と書いた。(注7)

しかしファニーからの手紙 (現存せず) はなかなか来ず、来てもなぐり書きで短いものであった。「君の手紙は、君がひどく謙遜してなぐり書きですわと言うけれど、私をとほろもなく大喜びさせてくれました。(第2の恋文)」「君のこの間の手紙は、私をとほろもなくひどく不満にさせました。(第3の恋文)」「だが手紙をひらくともう、その内容があまりにも短いを見てとったとき、不満が私を襲おうとしました。(第5の恋文)」「私はもう11月のはじめから君からの返事を心待ちにしているのですからね。私は、君の短い便りを受けると、すぐ手紙をさしあげました。なんの返事も来ません。1月に、私は、またお便りしました。マティーアスからも、君からも、返事がありませんでした。(第6の恋文)」

ファニーにとって、彼の情熱はわずらわしかったのか。ファニーは、ただ彼が立派な成績で法律学を修め、2人が晴れて婚約する日のみを待っているものであった。生い立ちや境遇の違いを思っていたためらう彼の態度が、ファニーに彼の恋の真剣さを疑わせた。優秀な法律学徒であった彼の規則正しい学生生活は、恋の葛藤ゆえに中断した。ファニーの父親は、ファニーの心が依然として彼にあるのを見て、同郷の教授に相談する。その教授のすすめで彼は教師の試験を受けた。彼は筆記試験を好成績で受けたが、口頭試験を無断欠席した。心証を害した教授の

報告が、彼とファニーの関係に決定的影響を与える。

1833年2月、彼はファニーの両親によって彼女との交渉を一切禁じられた。小説『晩夏』のリーザハが、若き日、マティルデの両親から彼女との交渉を禁じられたように。

1835年8月、即ちファニーとの交渉を禁じられてから2年半ののち、シュティフターは同郷同学の友人の結婚式に招待されて出席し、ファニーも列席した。新郎新婦は彼とファニーの共通の友人である。2日後の8月20日、彼はオーバーブラーンからファニーに第7の (現存する最後の) 恋文を書く。彼は、結婚した2人の幸福と自分たち2人の不幸との違いを嘆き、しかしファニーもまた同じ思いをしているのを、式の間ファニーの様子から見てとったと告げる。「君は、やはりいつも、私の心の花嫁でありました。」「私は今はもう、自分に、2年このかた抱いたこともないような満足を覚えています。」「そしてただひとり君を私の理念の花嫁に作りなそうと思いません。」「(第7の恋文)。

1836年10月、ファニーはほかのひとと結婚し、翌1837年11月、シュティフターもまた結婚する。リーザハとマティルデが、それぞれに結婚したように。

1839年9月、ファニーは男子を出産し、4日後、母子共に死ぬ。ファニー31才。もはやシュティフターには、ファニーとの現実の「晩夏」は訪れるべくもない。

1857年、小説『晩夏』成る。ファニー没後18年である。小説『晩夏』のリーザハとマティルデの恋は「晩夏」を迎えることができた。しかし現実のシュティフターとファニーの恋は、ファニーの死によって終り、「晩夏」を迎えることができない。シュティフターが、リーザハとマティルデに「晩夏」の時を与えたのは、即ち小説『晩夏』を書いたのは、ファニーを「理念の花嫁に作りなし」、ファニーとの「もう一度の」晩夏の恋に生きたかったからであろう。シュティフターには、ファニーとの恋だけ、「ただ一つの恋、その後にはもはやいかなるものもないほどの、特別な恋 (第7の恋文)」だったのである。

テキストと参考文献

Eben, K. und Müller, F.: Adalbert Stifter Sämtliche Werke VI, VII, VIII, XVII., Gerstenberg, Hildesheim, 1972.

米田 巍: 七つの恋文, 大学書林, 東京, 1960.

藤村 宏: シュティフター晩夏, 集英社, 東京, 1979.

谷口 泰: 『晩夏』論考(1), 上智大学ドイツ文学論集, 21, 179-200, 1984.

谷口 泰: 『晩夏』論考(2), 上智大学ドイツ文学論集, 22, 61-80, 1985.

椿 鐵夫: シュティフターの『晩夏』における物語の

二重構造について—『晩夏』は教養小説か—, 竜谷学会「竜谷大学論集」380, 70-112.

尾花午郎: “Nachsommer” についての覚え書—Bildungsroman か Liebesroman か—, 中央大学ドイツ学会「ドイツ文化」, 23, 1-24.

注

1. VIII, 138. (ローマ数字は上記 Sämtliche Werke の巻数, 算用数字は頁数を示す。以下同じ。)
2. VII, 250f.
3. VI, 233.
4. seit einigen tagen war nämlich Schoppe in eine

andre tonart umgesetzt und sein eigener restant und nachsommer geworden (es hatte sich spät endlich die liebe bei ihm eingestellt). Titan 4, 3.

5. VIII, 172.
6. 米田 巍: 「七つの恋文」による。以下シュティフターとファニーのことは同書を参考にした。
7. 米田 巍: 「七つの恋文」の訳文を引用する。以下手紙の文はすべて同書の訳文を引用した。
8. Brockhaus Enzyklopädie, 14, 515, Brockhaus, Wiesbaden, 1972.

(受理 昭和62年1月25日)